

# 信越本線移設、(仮称)厚生産業会館などで多額の税金投入へ

## 平良木議員が経緯や民意の確認求め総括質疑

9月定例議会が5日からはじまりました。市長による提案理由の説明の後、総括質疑が行われました。

日本共産党議員団からは平良木哲也議員が6日に登壇。事務事業の総ざらい、(仮称)厚生産業会館建設問題、信越本線移設事業などについて質疑を行いました。

### 地域事業の評価手順は間違い

事務事業の総ざらいの評価に関して、平良木議員は、地域自治区が自主的に定めて取り組んできた地域事業まで行政側から先に評価を下し、その後、地域協議会の意見を聴くという手順はおかしいと指摘しましたが、市長は、「どちらが先か後かという形式的なことではない。実際にその事業が必要かどうか問題だ」と答弁していました。しかし、これは都市内分権を重視するかどうかという本質的な問題です。



信越本線南高田駅付近

「最終的には地域協議会に諮問する」手続きをとり同意を得たとしても、分権を尊重することとは相容れないものです。(仮称)厚生産業会館建設問題で市は、この施設の建設の実施を前提に、整備検討委員会を設

置するとして、今回、関連経費を一般会計補正予算に計上しました。しかし、3月議会では、「(仮称)厚生産業会館の建設については、現在実施する環境には至っておりません」と市長がのべ、担当部長(当時)も「今後実施するしないも含めて今後のまた課題だとは思っておりません」と答弁していました。平良木議員は、「いつの間にか、建設実施が前提になっていくのはどういふことか。あらためて市民に問うこともなく、建設実施が決められたのか」と追及しました。これに対して市長は、「市長選の公約であり、市民からは建設に期待する声がある。建設を前提に提案した」とのべました。確かに市長選の公約のひとつでしたし、その実現への期待もあるでしょう。しかし、学校耐震化など緊急課題が他にもある中で、現時点で建設を具体化するのはいかかろうか。市民の声をしっかりと聴いたうえで対応すべきだと思います。なお、現在、建設費は示されていません。

### 議会にデータ示す時期は遅すぎ

さて、注目の信越本線移設事業です。2005年度に試算した事業費よりも10億円も増え42億円にもなった経緯と内容について平良木議員は、「地域事業費の見直し、枠の撤廃など、市の財政運営に関わって市民ぐるみで議論が行われ、力を合わせていくべきときに、これだけの財政支出が新たに発生することはないか」と疑問を投げかけた。市長は、「こうして発生した経緯、何が原因でこうなったのか、このことについて、それが発生したのか、このことについて、それが発生したのか」と問いま

## 「総合事務所のブロック化」で質疑

今回の総括質疑のなかで注目したことのひとつは、高波勝也議員(牧区選出)の「総合事務所のブロック化」についての質問にたいする村山市長の答弁です。

市長は、「現行体制の課題の検証をはじめ、求められる機能や組織の再編案について検討を進めてきた。具体的には、複数の総合事務所について、そのなかの基幹的な総合事務所に土木技師などの専門職を集約し、広域的に業務を行うことで効率化が図れないかとの考えから今年度モデル地区を設定し、試行的に実施することをめざした。しかし、木田庁舎を含めた業務分担の精査や業務の集約化による影響等の検証を慎重に行うべきとの判断から引き続き詳細な業務分担の整理を行っている。できるだけ早い時期にその実施を考えている」と答えました。

「特定の総合事務所の廃止は考えてはいない」とのことですが、「基幹的な総合事務所」という言い方がひっかかりました。

これに対して市側は、降雪などの条件設定でコンサルタントとの詰めが弱く、軌道消雪設備など新たに必要な工事が判明したと説明、「事業費をもう少し圧縮できないか、他にも技術的に詰められないか検討してきた」(総合政策部長)と答えました。また、8月10日に事業費についての具体的な数字が出たにもかかわらず、議会に示さなかった(示したのは26日の議案配布時)ことについて市側は、「内容的に個々の施設が必要かどうかの検討も進めた。出てきた数字を前回のコンサルの内容と比較作業にずいぶん時間を要した」(市長)とのべるにとどまりました。

スピーカーからラジオ放送が聞こえてきた時、理髪屋さんにいた人たちはどれほどうれしかったことか。一九三七年（昭和十二年）、全国初の有線放送は東頸城郡牧村大字原の明願寺から近くの理髪屋さんへ針金を通して送信されたことでスタートしました。先日、明願寺の住職、池永文雄さんから当時のことを教えてもらいました。

一九三〇年（昭和五年）に神戸から郷土に戻ってきた先代住職の池永隆勝さんがラジオを購入し、放送を聴けるようになったのが一九三六年（昭和十一年）。お寺に入りしていた近くの理髪屋さんは、詩も短歌も作る文化人でしたが、ある日、隆勝さんに「このラジオ、ちよつと家でも引いてもえんどうか」と頼みます。それで、高田の電気屋の技師さんから来てもらい実験してもらったところ、ラジオのある部屋からまっすぐ線を引き、山門にガイシを付けて、途中に支えをつくれれば理髪屋さんまで引けるということがわかりました。音がとてもきれいに入って、調子が良かったといひます。

スピーカーから流れてくる放送を聴いたお客さんたちは、理髪屋さんに「あんたんとこ、電気入っていないのに、どうしてラジオ鳴っているの」と不思議がり、話はすぐに近所に広がりました。アンプをつけて増幅器を大きくしていけば、三台くらいは付けられることがわかり、この年は三軒に広まったということでした。

さらに広がって、ラジオ共同聴取の会をつくったのが一九三九年（昭和十四年）です。隆勝さんは、マイクロホンを設置するとともにレコードプレーヤーを入れました。当時のラジオ放送は、お休みの時間帯がかなりありました。隆勝さんがその時間を利用して自主放送をやられたというから驚きました。浪曲や歌謡曲などの娯楽を提供し、地域情報も伝えました。「ご連絡します。あらかじめご承知置きください」と言うのが口癖だったことから、隆勝さんは「あらかじめのお寺さん」とも呼ばれたそうです。この共同聴取は一九四五年（昭和二十年）には五六〇戸に広がりました。

明願寺からの有線放送のことをお聴きしたその日、全国家族新聞交流会の仲間のみなさんとともに庫裡（くり）の二階に上げさせてもらい、放送設備やレコードなどを見せたいいただきました。そこで、とてもうれしいことがありました。全国でいくつも残っていないという昭和初期の蓄音機、フィルモンを池永文雄さんが動かし、そこから流れる音を聴かせてくださったのです。私にとってはもちろん初めて、まさに感動のひと時でした。

フィルモンから聞こえてきたのは、浪曲師、浪速亭桃太郎の『天野屋利兵衛、男でござる』。赤穂浪士、大石内蔵助を助けた浪速商人・天野屋利兵衛の物語です。「ペンペンペンペン……。そちはあっぱれの志の持ち主じゃのう。昨日まで、その方に白状させようと松野がかけた拷問をよくこらえた。そちが拷問をこらえておることを……」セリフも三味線の音もハッキリと聞こえました。そして、私には昭和の一〇年代、理髪屋などのスピーカーのそばで明願寺からの放送を真剣に聴き入る人たちの姿も浮かんできたのです。

私が有線放送に初めて出合ったのは、いまから五〇年ほど前です。黒いスピーカーからは源農協などのお知らせが伝えられ、「〇番さん、〇番さん」と交換手さんの呼び出しの声がかかると電話にもなりました。その有線放送の出発点が上越市牧区にあり、全国に広まったというのです。有線の歩みを知り、うれしくなりました。

## 「また来ちゃいました」

4日の大島区敬老会に参加した最高齢の人は、板山のばちゃん（小山イサノ。94歳）でした。私の伯母です。



大島区総合事務所の職員によると、「また来ちゃいました」と

と言っていたといひます。話好きで、普段は近所のばあちゃんとお茶飲みをし、畑に出ることもあります。腰はだいぶ曲がりましたが、まだまだ元気です。

### 歌人、柳川月さんを囲む会に参加

牧区の深山荘で開催された「柳川月さんを囲む会」に参加してきました。総勢23人。たくさんの人との出会いがあり、とても楽しい会でした。

会のメインは月さんの「90年の人生を語る」です。夫を亡くし手づくり新聞「ぎ・む一ん」を書き始めた頃の話、レッドパーズにあった家族とその後、全国家族新聞交流会のみなさんとの様々な交流等、初めて知

ることが多く、ひきつけられました。この日、月さんは、「ぎ・む一ん」の創刊号から100号までを1冊に製本したものを離さず、語り続けられました。「ぎ・む一ん」は月さんの「宝物」であり、語りの源泉でした。話のなかには苦い体験もあったはずなのに、なぜか、すべての話が輝いていましたね。

「月さんを囲む会」を提案してくださったのは全国で家族新聞を発行し交流しているみなさんです。脇山さん、清水さん、鈴木さん、市川さんなどは、長く家族新聞を発行し、頑張ってこられた人たちでした。参加者のなかには家族新聞を出していない人たちも何人かおられました。けれど、みんな、「ぎ・む一ん」を読み、月さんを好きな人ばかりでした。参加者全員が「ぎ・む一ん」との関わり、感想などを語り合いました。私もガリ版時代の月さんのチラシのこと、月さんの新聞を通じて励まされたことなどを語りました。みんな、話は尽きず、お風呂の中でも、ロビーでもおしゃべりが続きました。



柳川月さんは旧青海町出身で、現在、上越市大和在住。歌人、随筆家です。90歳。